

開国外交に活躍した人々と万次郎 その3

— (附) 万次郎の晩年の謎についての一考察 —

塚本 宏

開国外交に活躍した男たちの群像 つづき

(1) 井上清直 (1809-1868)

外国奉行の4人目に登場する井上清直は、自分よりずっと若い岩瀬に協力して外交交渉の場で活躍したが、どちらかと言うと陰に控えて岩瀬ほど有名ではない。

文化6(1809)年、御家人内藤歳由の三男として江戸で生まれた。ご存じ川路聖謨の実弟に当たる。幼くして持弓組与力・井上新右衛門の養子となり家督を継いで名を清直と改めた。17歳にして幕府評定所書物方という「筆生」(写本作り)に就き、後に勘定所留役助に採用され、さらに転じて寺社奉行所調役になった。この職で長年にわたり経験と実績を積み歴代の寺社奉行から厚い信任を得て、弘化4(1847)年には勘定組頭格(御家人から旗本へ)に昇進を果たした。既にお分かりのとおり、他の4人の外国奉行に比べると兄・川路聖謨同様、最低身分の出身であるから余程の努力家であり、実務能力に優れた能吏であったに違いない。

親交のあった木村喜毅は、井上を評して「人と為り忠凱(主にも友にも忠、かつ深い思慮をもって接する人柄)にして事務に練達し、言語明晰にして決断の才あり」と言っているが、阿部正弘は井上のこの性格、資質に目を付け、万衆の中から彼を選び出して、安政2(1855)年、下田奉行に就任させたのであって、その出自、官歴から見れば破天荒とも言える抜擢であった。自分が信任する川路の実弟ということも多少は影響したであろう。

彼の読みが的中し、翌年、アメリカ総領事・ハリスが下田に来航する事前の準備を整え、着任後はその応接でハリスと良好な人間関係を結んだことはもちろん、江戸城での將軍・家定との謁見、さらに岩瀬忠震と共に「修好通商条約」の条文の討議に奔走して、安政5(1858)年、岩瀬と共に全権として修好通商条約の調印を成し遂げた。続いて外国奉行を兼任して。露、英、仏とも通商条約を締結した。外交官僚として立派な働きをし彼の人生における絶頂期であった。

翌安政6(1859)年、將軍後嗣問題では岩瀬と同じ一橋派だったため、井伊大老により、小普請奉行に左遷されたが、間もなく「軍艦奉行」として復帰し、幕府海軍の拡張にも尽力した。

文久2(1862)年には南町奉行に就任したり、元治元(1864)年、3度目の外国奉行を務めたが然したる働きは出来ず、命じられるまま関東郡代、北町奉行などの職に就き、混乱する幕末期の江戸(浪士の一群による暴行、掠奪、放火等悪事の横行する)の收拾に追われ休む暇もなかった。風邪をこじらせたが静養もかなわず、北町奉行現職のまま慶応3年12月(1868年1月)死去、享年59歳。まさに過労死としか言いようがない。実弟の急死に接し、川路聖謨はポロポロと涙を流して井上の死を悼んだ。ここには、嘗ての川路の雄姿を見ることが出来ない。

(2) 堀 利熙 (1818-1860)

堀利熙(としひろ)は、御目付・堀利堅(高二千五百石)の四男として江戸に生まれた。ご存じ林

復齋、岩瀬忠震はそれぞれ伯父、従兄弟に当たるといふ名家の出身である。天保14（1843）年、昌平黌大試に合格し、嘉永5（1852）年、小姓組徒歩頭を経て翌年、目付に昇進、同6年に「海防掛」に抜擢された。ここまでは、外交官としてはほぼ岩瀬と同じコースを歩んでいる。

嘉永7（1854）年には、当時、蝦夷地における曖昧だったロシアとの国境問題を松前藩だけでは対応しきれなくなり、堀を「松前表御用」に任じ、樺太・北蝦夷へ巡検・調査に派遣した（同行の従者の中には榎本武揚、玉虫左太夫らもいた）。彼らの綿密な調査に基づく提案が採用されて、蝦夷地を幕府直轄地にすると決定し、堀はそのまま「箱館奉行」に就任。任地での彼の開明政策は評判となった。

安政5（1858）年には、新設の「外国奉行」を兼帯（任地は箱館のまま）、翌6年には神奈川奉行も兼任して、諸外国との条約締結交渉に活躍し、横浜開港にも尽力した、まさに「幕末の外交交渉の一番手」としての力量を発揮している。

今後、一層の活躍が大いに期待されながら、突然、不幸な事件に巻き込まれてしまう。万延元（1860）年、当時のプロイセンの外交官・オイレンブルグと通商条約の交渉中、当初は「プロイセン一国」（ドイツはまだ統一国家ではなかった）だけのはずが、最終段階で急にプロイセン付属の周辺・30か国を列記する草案に切替えられた。これに対し老中・安藤信正から強く叱責されるも堀は何らの弁明もせず、切腹自殺をする（同年11月）。享年42歳。

事件の謎は解明されてはいないものの、かなり強圧的態度で交渉していたオイレンブルグが、堀の自刃の報を知って急に態度を一変し、元のプロイセン一国だけの条約締結に戻して決着を着けた。真相は、堀のオイレンブルグに対する抗議の自殺説も捨てきれない。

文字通り、「命がけ」で外交交渉に奮闘した幕府の外交官僚・堀利熙がいたことを忘れてはならないと思うのは筆者だけではなかろう。

（3）小栗忠順（1827－1868）

小栗忠順（ただまさ）は、単に「開国外交」に活躍したと言うだけの人物ではなかった。それどころか明治政府は彼の描いた近代国家の「青写真」をそのまま引き継いだに等しいとさえ言われるほど、多岐にわたる職責をこなして立派な業績を残しながら、「斬首」の刑により果てるという悲劇の主人公でもあった^{5)、29)}。



（像）育公順忠介野上栗小

例によって、彼の出自から始めると、二千五百石の大身旗本・小栗忠高（新潟奉行も務めた）の一子として江戸で生まれた。8歳から安積良齋の私塾に学び、武術を島田虎之助に師事、のちに直心影流免許皆伝を受け、砲術、さらに柔術と山鹿流兵学まで身に付けた文武の才に恵まれた若者として成長、林田藩・前藩主の娘と結婚するという名門の出身であった。

幕府内での職歴は、天保14（1843）年、江戸城に初登城から始まり、西丸書院番、進物番出役を経て、ペリー来航後の嘉永7（1854）年に異国船に対処する詰警備役となるが、この頃から「積極的通商政策」を主張するようになった。

大きな転機が訪れたのは、万延元（1860）年、日米修好通商条約批准のため遣米使節・目付

(監察)として正使・新見正興、副使・村垣範正と共にポーハタン号で渡米(正確には安政7年1月18日出発、万延元年9月28日帰国)したことであった。(一説には、もともと、ワシントンにおける批准書交換をハリスに提案したのは岩瀬忠震であり、自らもその任に当たるつもりであったが、この時期、岩瀬は「永蟄居」の身で家から一步も出られない境遇にあった。)

さて、アメリカでの小栗は、井伊大老の指示もあり、大量の「小判金貨流出問題」、言い換えれば「通貨の交換比率」の見直しに挑戦し、フィラデルフィアの造幣局で日米それぞれの「小判」、「ドル金貨」の成分分析実験を行い、日本の主張の正しさを証明して見せた。これにより比率の改定には至らなかったものの、アメリカ人からは高い評価を得たのである。さらにワシントン海軍工廠を見学して、製鐵、造船、金属加工などの先進技術を目の当たりし、それら工場の動力すべてに蒸気機関が使用されているのに驚き、彼我の格差を実感し近代国家建設に情熱を燃やしたに違いない。記念に、「鉄製ネジ」を大切に持ち帰ったことは有名である。

帰途は、西回り大西洋を經由で無事に帰国、その功績により二百石加増され二千七百石となり、「外国奉行」に就任した。

その後の活躍は目覚ましく、全貌を紹介するには紙幅が足りないので、主な役職だけ列記したあと、いくつか特筆する業績を紹介しよう。

勘定奉行(前後4回)、江戸南町奉行、歩兵奉行、講武所御用取扱、陸軍奉行並(2回)、軍艦奉行(2回)、等々。

① 横須賀製鉄所(のちの横須賀海軍工廠)の建設

文久3(1863)年、製鉄所の建設を提案した際、「土蔵つきの売家をあとに残すのも面白いではないか」と言ったという。当時、アメリカは南北戦争で疲弊し外国の援助は無理という事情もあり、駐日フランス公使・ロッシュとの繋がりからフランス人・ヴェルニーを招聘して「所長」に任命(幕府公認の事業としては初めて)、この人事により雇用規則、社内教育、月給制など経営学や人事労務管理の基礎がわが国に導入された。

② 軍事力の強化と武器の国産化を推進

幕府陸軍をフランス軍人に指導させるためにフランス軍事顧問団を入国させて訓練に当たらせたり、銃砲製造の合理化を進め、西洋式火薬工場も新設した。

③ 経済面では、株式会社「兵庫商社」の設立、日本初の本格的ホテル「築地ホテル」の発案・指導により清水喜助らが建設

いよいよ、幕府終焉の時期、慶応3(1867)年10月の第15代将軍徳川慶喜の「大政奉還」に続き翌慶応4年1月に戊辰戦争が始まる。小栗は、榎本武揚、大鳥圭介、水野忠徳らと共に「徹底抗戦」を主張、小栗は、箱根を下ってくることを陸軍で迎撃、駿河湾の幕府艦隊からの射撃により薩長軍を殲滅すると言う「作戦」を提案した。大村益次郎が後にこれを聞いて、「この策が実行されていたら今頃首はなかつただろう」と恐れた言う逸話が残っている。しかし慶喜はあくまで武備恭順の姿勢を崩さず、小栗の作戦は採用されなかった。

小栗は、御役御免の後、慶応4(1868)年2月末、「上野国権田村への土着願書」を提出、3月初めには一家揃って、権田村東善寺へ移住し、水路の整備や塾を開くなど静穏な生活を送っている。遂に、同年閏4月4日、小栗は東山道軍の命令による高崎・安中・吉井藩兵に東善寺で捕縛され同6日、取調べもなしに、鳥川の水沼河原(現・群馬県倉渕町水沼)で[斬首]された。享年

41歳。

この処刑は、出先の一隊長・原保三郎らの独断によるものだったが、どうしても首を切り難いので、棒でその腰をつついて、「もっと首を下げろ」と言ったところ小栗は振り向きざま「無礼者」と叫んだ。再度振り下ろされた一太刀では上手くゆかず三太刀目で首を切り離したという³⁰⁾。

小栗の遺族の世話をしたのは、嘗て小栗家の奉公人、三野村利左衛門（のちの三井の大番頭）であったことを申し添える。

また、明治になってから大隈重信と東郷平八郎は、小栗を評してそれぞれ「明治政府の近代化政策は、小栗忠順の模倣に過ぎない」、「日本海海戦に勝利できたのは、製鉄所、造船所を建設した小栗氏のおかげであることが大きい」と言っている³¹⁾。短い言葉で小栗の偉大さを実に見事に言い尽くしているのではないか。

(4) 森山栄之助 (1820-1871)

最後に、これまで述べて来た幕府の外交官僚たちとは一味違った経歴の持ち主である、森山栄



之助に登場してもらおう^{5), 32)}。「日米和親・修好通商」两条約の殆どすべての交渉の最前線で、英蘭2か国語のできる「通訳」として、実質的な外交官同等の働きをした人物を落とすわけにはいかないからである。

文政3(1820)年に、代々、オランダ通詞を務める長崎地役人の家に生まれた。元々、世襲通詞として当然だろうが猛勉強の結果オランダ語には熟達しており、日常会話に不自由はなかったという。英語へ関心を持つようになったのは時代の趨勢を敏感に感じて、当然の成行きからであろう。

途中経過は割愛するが、栄之助の英語が急速に上達をするのは、ラナルド・マクドナルドとの出会いであったことは有名である。イギリスの毛皮商人だった父と現地インディアン酋長の娘を母とする混血児・マクドナルドはオレゴンで生まれ、若い頃から日米が通商する時代の到来を夢見ていた。捕鯨船の船員となり、嘉永元(1848)年に遭難を装って北海道利尻島に漂着、直ぐに捕らえられ、松前藩の手で長崎送りとなったのが縁で、英語を学びたい栄之助と日本語、ひいては日本文化を知りたいマクドナルドとは互いに意気投合し、熱心な勉強が開始された。期間は米国軍艦プレブル号が遭難船員の出迎えに来るまでの僅か7か月であった。艦長との折衝ではマクドナルド仕込みの英語がそのまま生かされ、オランダ商館長の助言もあって無事に別の荒くれ捕鯨船漂流民とも14名のアメリカ人の帰国が叶ったのである。この一件で幕府の栄之助に対する信頼が一気に高まったことは言うまでもなく、栄之助の以後の活躍に繋がった。

続いて、嘉永3(1850)年には長崎奉行の命により、大通詞・西吉兵衛、名村五八郎らと共に英語辞書の編纂に参画し、翌年には「エゲレス語和解」の第一冊目を幕府へ献上した。

次に、嘉永6(1853)年には、長崎へ来航したロシアのプチャーチンとの外交交渉に、川路聖謨を助けて正確な通詞を務めた栄之助の活躍が評価され、「大通詞」へ昇格を果たしている。例のゴンチャロフは、この男は顔形が整い、まなざしが大胆、英語はわずかし話さないが聴く方は殆ど分かったと言った上、今後は日本の諸法律(中でも鎖国などの)を変えるべきと考えていると知って驚いたとの感想を述べている。

嘉永7（1854）年、ペリーの再航に際し、通詞団主席となり林復齋らの交渉を助け、アメリカ側の首席通訳、サムエル・ウィリアムズに、ほかの通訳がいらないほど英語が達者で大助かりだとか、彼の教養の深さと育ちの良さに好感を持った、と言わせている。

さらに安政3（1856）年に始まるアメリカ総領事・ハリスとの通商条約交渉では、岩瀬、井上と共に大いに活躍し、ハリスの日記にも、会見の場には上席通訳が列席し（この頃、栄之助は「勘定方調役並」に昇格し、名前も「多吉郎」に改めている）、至って気持ちの良い態度と真の丁寧さを持った立派な通訳であると評価している。安政5（1858）年には、日米修好通商条約に右へ倣えの形で欧米5か国との条約が締結されたが、そのすべてに多吉郎が通訳や条約文作成に直に関わったことは言うまでもない。わが国最初の通訳出身「専門外交官」の名に恥じない働きであった。

文久2（1862）年には、「開市開港延期」交渉のため先に出発した、竹内遣欧使節団を追ってオールコックと同行した多吉郎はロンドンで合流している。帰国後、長年にわたる功績により外国奉行通弁役頭取に任じられた。

その後は華々しい活躍の機会もないまま、英語塾を開いて、弟子の養成に当たるも（門下生に、津田仙、福地源一郎、福沢諭吉など）、明治期に入り新政府から彼の英語力、外交経験などに大きな期待がかけられ、仕官への強い勧めがあったが、彼は頑として受け付けなかった。長年の外交交渉の心労から体力も気力も失くし一気に老け込んでしまったという。一方、そうではなく倒れた幕府に殉じて、仕えることを潔しとしなかつたという説も有力であり、筆者はこの説をとりたい。

明治4（1871）年3月、横浜で急死、享年51歳。

結びにかえて

そろそろ結論を急ぐことにしよう。

ここまで、幕末の開国外交に活躍した12人の人物について精粗はあるものの、その実像を解説して来た。当協会・会員にとっては江川坦庵、水野忠徳などは先刻お馴染みのはずで物足りなかつたであろうし、川路聖謨や小栗忠順は、「小説やテレビ・ドラマ」のヒーローとして人口に膾炙している有名人に違いない。

しかし、残りの方々についてどれほどご存知だつたであろうか。少なくとも幕末、未曾有の国難ともいうべきイギリスを筆頭にする欧米列強の植民地的侵略政策を見抜き、見事に跳ね返すだけの力量を持った、優秀な先輩たちがいて文字通り「命がけ」の奮闘をしたからこそ、今日の日本があることだけは伝えたかつた。しかも、明治新政府によって意図的に消し去られた人たちがあつたことも理解して頂きたい。

さらに言うなら、安政4（1857）年に修好通商条約の締結前に病死した林復齋は別格として、一旦は賊軍として収監されながら新政府に出仕し、大審院権大書記まで勤め上げて大往生を遂げることが出来た永井尚志を除き、残り10人は、いかにも不幸かつ悲惨で不本意な境遇で生涯を終えざるを得なかつた。

筆者の分類では、①「過労死」：江川坦庵、阿部正弘、井上清直、②「憤死（狂死）・うつ病」：水野忠徳と岩瀬忠震、③「自殺」：堀利熙と川路聖謨（しかも拳銃自殺）、④「処刑」：小栗忠順（取調べ抜きの斬首）、⑤「徳川幕府に殉じる」：大槻磐溪（一時は戦争犯罪人として終身刑の身）、森

山多吉郎、ということになるだろうか。

翻って、万次郎とこれら12人との関係について考察してみよう。

まず、幕府の命で急遽、江戸へ出府した時の万次郎は、25歳の若者で、彼らよりずっと若輩で



あった。しかし、幸運にもホイットフィールド船長らに救助されてから約10年間。言葉も身形もすっかりアメリカ社会に同化し、初等学級から船員専門学校までの教育を受け、航海術はおろか天文学、測量術、算術などもマスターしていた。その上キリスト教（ユニテリアン教会）にも親しみ、立派な社会人に成長していた。何よりもアメリカで日常の市民生活を実体験して、民主主義とは何かも身に付け、同時に蒸気機関、電気通信、写真など西洋文明の先進的技術を一通り扱える、当時としては最先端の文明人であった。

一方、上述の12人は学者、政治家、官僚とそれぞれ役割が違っても「開明派」のリーダー、封建性社会のエリートではあったとはいえ、如何せん、新文明の「実学」はゼロで主として書物から学ぶ「文献学者」の域に留まるしかなかった。従って、万次郎の説く新鮮で具体的なアメリカ社会の実情を聴くことで、驚くと同時にもともと進歩的な開明派である自らの思想の正しさに自信を深めたに相違ない。

つまり、最初は万次郎が「実学」の師であり、彼らはその弟子という関係にあったろう。残念なことに万次郎は僅かな自筆の日記を残しているものの、本人自らの「思想信条」を語る書き物は一切保存されていないので、あくまで推測するしかない。

そして、坦庵が期待を込めて、ペリーとの交渉に際し万次郎を通訳に起用したいという提案が水戸藩主・徳川斉昭に反対されて以降、ペリーはおろかハリスとの交渉にも全く関与出来なかった。もともと外交の門外漢だっただけに彼の経験と頭脳をもってしても、専門家として成長するチャンスが失われたことは惜しまれる。

その後、航海書の翻訳、「日米対話捷徑」の刊行などの業績もあり、万延遣米使節団の随伴艦・咸臨丸の通弁主務として再渡米、帰国後は小笠原視察団の通訳、念願の捕鯨事業も手掛けた後、新政府になってから開成学校（のちの東京大学）教授に任命されたり、普仏戦争視察団（大山巖・団長）の通訳として欧米へ出張もしたが、ロンドンで病气（足の潰瘍）になり、厳しい外交交渉の舞台に上ることは遂になかった。

つまり、一群の「外交官僚」とは大きく水を開けられ、彼らの活躍を尊敬しながらも横目で眺めるだけの立場に逆転したのである。しかも、その彼らが次々に不幸で悲惨な最期を遂げたり蟄居・謹慎していることを知って、万次郎が大きなショックを受けたことは容易に想像される。なかでも万次郎とは年齢が近く、職業が同じ通訳（英語と英蘭語の違いはあったが）だったことから、森山の生き方には身につまされるところもあったのではなかろうか。

一方、薩長など有力外様藩の下級武士が新政府の要職を独占する、いわゆる「藩閥政治」の時代を迎えたが、若き日の万次郎が体験した本物の「民主主義」社会との余りに大きな落差に嫌気がさして「新政府の小役人」にはならなかった。

晩年の約30年間は、医師として成功を収め裕福な家庭を築いた長男・東一郎一家に寄寓しながら、「無気力で無為」の毎日を過ごし、最期は京橋弓町の東一郎宅（現・中央区銀座2-4-1

2) であっけなく脳出血で死去。享年71歳。素直で自然な死に様であったと言えよう。

以上、彼の晩年、無為だった謎について、僅かにその一部に迫ることが出来たかも知れないが完全に解き明したとまで言い切れず、さらなる研究を待たねばならない。

注

29) 前掲2)、「徳川近代の柱・小栗上野介忠順」の章(160-262頁)

30) 山田風太郎『人間臨終図鑑』上、123-124頁、(徳間書店、1987年)

31) Wikipedia(小栗忠順)による

32) 江越弘人『幕末の外交官 森山栄之助』、(弦書房、2008年)